

## 嘉隆帝陵周辺に形成された文化的景観のマネジメント手法としてのエコツーリズムの可能性と課題 ～ ヴィエトナム・フエ京城都市の変容に関する研究 (24) ～

文化的景観	エコツーリズム	ユネスコ世界遺産	正会員	○古川 尚彬	1
バッファゾーン	皇帝陵	地域協働	同上	赤澤 貴仁	2
			同上	寺澤 裕実子	3
			同上	中西 美裕	4
			同上	川原 晋	5
			同上	佐藤 滋	6

### 1. 研究の背景と目的

フエは、ヴィエトナム最後の統一王朝「阮朝（1802-1945）」の都が置かれた都市で、阮朝時代とその以前に建造された建築は、1993年にユネスコ世界遺産に「フエの遺跡群」として登録されている。本稿で扱う阮朝初代皇帝「嘉隆帝」とその親族の陵墓群<sup>1)</sup>（以下、嘉隆帝陵と記す。）もフエの世界遺産を代表する遺跡の1つである。

著者らの他、歴史家ファン・ティン・ハイ<sup>2)</sup>も指摘している通り、フエの阮朝歴代皇帝陵（以下、皇帝陵と記す。）の配置計画の原理には、風水思想の影響が色濃く表れている。また、阮朝工部によって描かれた嘉隆帝陵の絵図<sup>3)</sup>には、山や川、水路、水田、集落が描かれており、それらの要素が陵墓群の設計の中に綿密に組み込まれていることが、著者らの既往研究<sup>4)</sup>で明らかになっている。

阮朝が始まるよりも前から当該地域に存在していた集落は、その後嘉隆帝陵が完成してからも存続し、現在に至るまで皇帝陵域内の湖と連結している水田や水路の手入れを行い、背後の圍繞山を里山として利用してきた。集落がそうした活動を通じて、皇帝陵周辺の環境管理を担ってきた状態とその様は、「文化的景観」として評価されるべき地域の資産であると云えよう<sup>5)</sup>。

当該地域が有する価値は、建造物単体ではなく、その周辺の自然や集落と調和するようにデザインされた環境の総体であり、またそれを可能としている技術にあるが、そうした価値を保全し、観光資源として活用する動きは見られない。フエでは、前述の世界遺産登録を契機として遺跡の修復・再建事業は進み、各遺跡をつなぐ道路や橋が建設・整備され、今では毎年多くの観光客が訪れるようになっているが、現状は遺跡観光にしか注目が集まっておらず、観光振興によって得られた恩恵が環境管理の担い手である集落へ行き渡らない構造的な問題がある<sup>6)</sup>。

そこで本稿では、そうした背景をふまえた上で、まず著者らが従来の遺跡観光に替わるオルタナティブとして考案したエコツーリズム案の特徴を解説し、次に、その理念を体現するものとして設計し集落住民有志らと企画・実施したエコスタディツアー（以下 EST と略す。）について報告し、最後にその結果の分析を通して、当該地域の文化的景観のマネジメント手法としてのエコツーリズムの可能性と課題について考察する。

研究対象地は、前稿（その 23）、前々稿（その 22）と同様で、トゥアティエン・フエ省香江沿いに位置する嘉隆帝陵とその周辺集落（定門村）とした<sup>7)</sup>。

### 2. 嘉隆帝陵周辺におけるエコツーリズム案の3つの特徴

#### 2-1. 歴史生態学的環境と環境制御技術の学習機会

阮朝初代～第4代の皇帝陵の陵域内には、いずれも大きな湖があり、それらは陵墓建築と調和するようにデザインされている。こうした景観は今も訪れる観光客を魅了しているが、広大な湖面をモンスーン気候の中で1年中きれいに維持することは容易いことではない。いかに乾季の渇水期に多くの水を貯めて、雨季や洪水期にいかに雨水をスムーズに排水し、余剰の雨水をいかに広範囲の水田へ送水するか、そうした水環境の管理技術は、ヴィエトナム中部における極めて特徴的な環境制御技術であると考えられるが、一般には殆ど認知されていない。

著者らが企画したエコツーリズム案には、嘉隆帝陵の建築遺産を保護するために造られた農業水利施設を見ることで、農業土木技術遺産としての価値を共有するための仕組みがあることが特徴の1つである。

#### 2-2. エコツーリズムの舞台として輝くバッファゾーン

現在文化財保護のためのバッファゾーン<sup>8)</sup>として定められたゾーン2は、プロパティとして定められたゾーン1からおおよそ10mの距離を同心円状に広げられた非常に狭小な面積しか無い。しかし、上述のように、皇帝陵は周辺環境と一体としてデザインされているのであり、陵墓建築のみを保存するだけでは不十分であるから、当該地域が本来有している価値を保全するためにはバッファゾーンを拡げる必要があることは事実である。

ただ一方で、現状では文化財保護のために設定された開発規制が上述のような環境管理を担ってきた集落生活を只々制限するだけのエリアと認識されていることから、自治体中心にその拡張に難色を示している。

著者らの考案したエコツーリズムにおけるバッファゾーンの位置づけはそうした認識とは全く異なる。皇帝陵の周辺に設定されるバッファゾーンは、設定された領域内で自然や集落の環境を保全できていれば、新たな価値を生むことができる「社会資本として潜在力を有するゾーン」と位置づけた。つまり、皇帝陵周辺におけるバッ

ファブーンはエコツーリズムの舞台であり、集落はその舞台を適正に演出（保全・管理）することができれば、それに見合う対価を受け取ることができる、という視点がこの構想のベースにあることも特徴の1つである。

### 2-3. エコツーリズム関連イベント実施への集落民の参画

前稿でも触れたが、2005年に陵墓域の雨水排水路の拡幅事業（観光目的の運河化）を契機に雨水を水田に貯められない状況になり、皇帝陵周辺の水利構造は大きく壊れてしまった。それ以前には自給自足できていた集落民が水不足から耕作を放棄する事態となり、今では集落民の多くがパルプ材の植林伐採を行う林業に従事している。

そうした中で、伝統的な水利システムが壊れる前の状況を知っていて、かつ当該地域の生態学的環境の再生を目指したい集落住民有志が、著者らの考えに賛同して、エコツーリズムの関連イベントの企画・実施メンバーに入っていることも特徴の1つである。

## 3. エコスタディツアー（EST）の社会実験

### 3-1. 皇帝陵周辺を巡る EST の構想

#### 1) EST の目的

皇帝陵周辺の広範囲にデザインされた歴史生態学的環境の価値を共有し、発信する方法としてのスタディツアーの有効性を、参加者の全体に対する印象、各解説内容に関する関心と理解、潜在的な経済的貢献度（2回目のみ）を測ることによって検証することを目的として実施した。

#### 2) 社会実験の実施体制とツール

##### ① 運営側の実施体制

i) ツアーガイド：各回1名（英語か日本語ができるベトナム人ガイド）、ii) 地元案内人：2名（定門村代表）、iii) バイクタクシー：14名（定門村の村民）、iv) サポートスタッフ：早稲田大、首都大、学生・教職員合わせて6名

##### ② ツアーの進め方

ツアーガイドと集落有志の地元案内人役が決められたスポットで、環境の解説を行い、適宜著者らが補足や進行補助を行う形で進めた。

##### ③ ツールと配布物

解説補助用紙芝居、うちわ型ガイドマップ（図1）、スタディガイド（図2。※英語版の他、越語、日本語版を用意）

#### 3) EST で廻る基本的なスポット（ベーシックルート）

ESTで廻るスポットを表1に記す。嘉隆帝陵周辺地域における特徴的な文化的景観、およびその基盤にある生態学的環境とそれらを支える技術について学習するためには、定められたスポットを巡るルートで廻る必要がある。

### 3-2. EST 社会実験の実施概要

2017年度に2回（計3日間）実施したESTの概要を次頁表2に記す。9月に実施した第1回ESTは、ツアー中に学習するコンテンツの確認を重点的に行い、参加者は主催者が指名した地元の学生や自治体職員、フエ遺跡保存センター（以下HMCCと記す。）の職員とガイドらであった。2018年3月に実施した第2回ESTでは、第1回EST



図1 工部発行絵図を元に作成したうちわ型ガイドマップ



図2 英語版スタディガイド（上：テーマ毎の解説が書かれた表面）

表1 ESTのベーシックルート

スポット1	参拝経路の価値の解説（経路沿いにある集落、水田、遺跡の関係について）
スポット2	陵墓周辺の空間構成の解説（絵図に描かれた空間と実際の見え方について）
スポット3	天授山麓の水田と月湖の間にある水利システムの解説（沈砂池としての水田の役割について）
スポット4	石畳の水路を通じて水田から月湖へ速やかに導水し、渇水期に効率的に水を貯める水利システムの解説
スポット5	天授右陵（嘉隆帝第2夫人の墓）で計画的に造られた山容景観（山当て）の解説
スポット6	月湖排水口近くにある調整池、月湖の排水口の機能に関する解説
スポット7	瑞聖陵、圍繞山、水田の生産景観のパノラマが織りなす文化的景観の解説

で得られた改善に向けた意見やアイデアをふまえて、より観光ツアーとしての完成度を高めて改良したものを実施した。第2回については一般観光客を現地で募って実施した。公募方法は現地の主要ホテルへフライヤーを配布し、先着順で被験者を募った。

### 3-3. 解説内容に対する参加者の関心度・理解度測定の結果

#### 1) アンケート設計について

まず、アンケート項目を表3に示す。大きく分けてスポットごとの関心度と理解度に関する回答を求める内容であったが、参加者にはその他に各種体験イベントの評価に関する回答も求めた。また、第1回に関してはグループ議論で意見交換をしてもらい、ツアーの改善に向けた提

表 2 EST の社会実験の実施概要

	第1回 EST	第2回 EST	
		1日目	2日目
実施日	2017年9月12日	2018年3月15日	2018年3月17日
時間	7時半～12時半	7時半～12時半	7時半～12時半
参加者数	9	6	5 (アンケート回答数は4)
参加者属性	フエ在住ベトナム人	日本人観光客	英語圏観光客
参加者詳細	大学生2名 CPC※1 代表2名 HMCC 職員5名 (内訳ガイド部3名、遺跡警備部、渉外部、各1名)	大学生旅行者4名 社会人旅行者2名	オーストラリア人夫婦と子供3名
参加費	無料	無料	無料
ツアー内容	ベーシックルート + 体験イベント A ※2	短縮版 ※3 参観イベント ※4 体験イベント B ※5	短縮版 参観イベント 体験イベント B
使用言語	ベトナム語	日本語	英語
現地移動手段	徒歩+バイクタクシー	徒歩+バイクタクシー 手漕ぎ舟 (湖上)	徒歩+バイクタクシー 手漕ぎ舟 (湖上)
事前説明会	なし	あり (前日)	あり (前日)
ツアー評価	関心度・理解度アンケートとグループ議論	満足度アンケート	満足度アンケート

※1 CPC=当該地域が属する行政最小単位であるフントー社の人民委員会  
 ※2 体験イベント A=季節のフルーツであるザボン (Thanh tra) と蓮の実の試食  
 ※3 スポット 5 を廻らず、スポット 0 のガイダンスは事前説明会で置き換えるパターン  
 ※4 参拝イベント=嘉隆帝陵の建築を見て、参拝する一般的な遺跡観光で行われるイベント  
 ※5 体験イベント B=地元のお米を使って作ったライスペーストの試食と地元のお茶の試飲

表 3 アンケート項目

スポット 1	参拝経路での説明について
項目 1-1	参拝経路の価値の説明
項目 1-2	経路沿いにある水田が住民によって管理されていることの意味や重要性の解説
項目 1-3	参拝経路沿いの水田の管理が困難に陥っている状況の説明
スポット 2	天授陵の前での説明について
項目 2-1	嘉隆帝とその親族の陵墓群の空間構成に関する説明
項目 2-2	風水思想をベースに設計された水と山容を取り込んだ景観についての説明
項目 2-3	景色だけではなく、雨水を集める仕組みが造られていることについての説明
スポット 3	天授陵麓での説明について
項目 3-1	天授山から麓の水田を通して月湖へ出ていく雨水の流れに関する説明
項目 3-2	上記の水利システムを支える施設が壊れているという解説
項目 3-3	水田に山からの雨水に混ざっている泥を落とす役割があるという説明
項目 3-4	住民の一部が水田耕作をやめてアカシア林業に移行しているという説明
スポット 4	月湖周りの丘に造られた護岸や水門、水路などの構造物の説明について
項目 4-1	土留めの石積みに関する説明
項目 4-2	湖周りの護岸が(遺跡修復・木材運搬用の)トラックが原因で崩壊していること
項目 4-3	石置の水路の役割 (渇水時に月湖へ効率的に雨水を集める役割)に関する解説
項目 4-4	阮朝時代に描かれた絵図にこうした水路が描かれていることについて
スポット 5	天授右陵前での景観に関する説明
項目 5-1	山頂を正面に軸を据える造景理念についての説明
スポット 6	嘉成殿前の遊水池、出口の堰に関する治水技術の説明について
項目 6-1	洪水時など大雨が降った際の遊水池、調整池として機能しているという説明
スポット 7	瑞聖陵 (嘉隆帝実母の墓) とその周辺における文化的景観の特徴と課題
項目 7-1	瑞聖陵は絵図の表現されている世界観と要素が確認できる場所だという説明
スポット 8	全体の内容について
項目 8-1	嘉隆帝陵では囲繞山の山容景観と水利システムが造られていることとその価値

案を整理した。一般の観光客を対象に実施した第2回には、参加者に支払意思額についても回答を求めた。

## 2) 第1回 EST のアンケートおよびグループ議論の結果

### ① 解説について

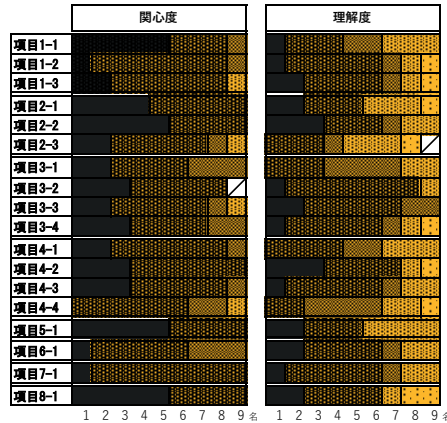
表4に関心度と理解度に関するアンケートをまとめた。全般的に、関心度に関してはおおそ全ての項目において高評価を得られた。理解度に関しては、関心度と比べて評価が低いことから、ツアー時間と行程内で解説内容を理解することが難しかったと考えられる。

### ② ガイドについて

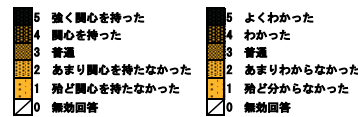
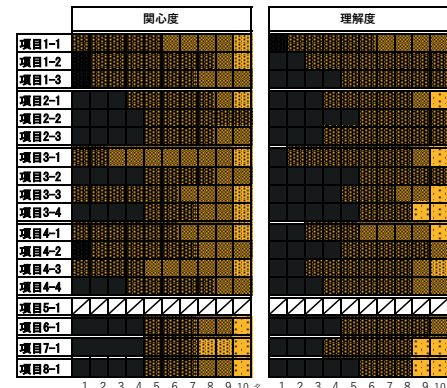
ツアーガイドについては、「豊富な知識があり、説明が明確で伝え方もよく熱心であった」と概ね好評であった。

表 4 EST 中の解説に関するアンケート結果 (上表: 第1回, 下表第2回)

### 第1回EST (ベトナム人)



### 第2回EST (外国人旅行者)



また、地元のサポートガイドについては、「ツアーの間、非常に良い役割を果たしていた」といった意見が出された。地元で農業を長年続けてきた実体験に基づく補足説明や水利システムが崩壊した後自力で改善しようとしている試行錯誤の話、痕跡程度しかない水利施設の壊れる前の様子などを熱心に解説していた内容が好評であったと考えられる。

### ③ 構成について

第1回の全体の感想としては、「ESTの企画に至る調査の内容、価値が高いので、改良を期待する」という評価があったほか、

「嘉隆帝陵を巡る標準的なツアーとして改良されうる」というガイドからの意見も出された。

### ④ その他

当該ツアーに参加していた地元の自治体の代表からは、景観や水利システムが壊れているものを見るのも勉強になるが、植林・伐採のコントロールなど、できる範囲で改善してから観光客に見せたいという意見も出された。

## 3) 第2回 EST のアンケート結果

### ① 各コンテンツへの関心度・理解度について

前頁表4に第2回 EST のアンケート結果を示す。第1回 EST とは逆に、殆どの解説について関心度が理解度を下回る結果となった。あくまで参考情報と云えるが、事前説明会を開催したことによって、予備知識をインプットしてからツアーに出ることで現地での解説の理解度を上げられる可能性が示されたと云えよう。

### ② 全体の満足度と再訪意向について

全体の満足度は、5段階中5を付けた参加者が7名、4を付けた者が3名という結果となった。参加費無料としたことから、この満足度評価はあくまで参考値となるだろうが、再訪意向を示した者は10名中9名であったことから、

当該ツアーの潜在的な効果は高いと考えられる。

### ③ 支払意思額に見る当該 EST ツアーの課題と可能性

3月に一般観光客向けに実施した第2回 EST で計10名に支払意思額について尋ねたところ、平均で2,782円<sup>9)</sup>という結果で、実際に掛かった1人あたりの経費3,333円に届かなかった。その一方で、開発途上国の環境問題に高い関心を持っていると答えた参加者が高額を提示していることなどから、専門的な解説に高い対価を支払う意思のある層の存在が確認された。

さらに、各参加者が希望するイベント（農業体験、ホームステイ、釣り、ハイキング、他の皇帝陵参観等）と組み合わせることで最高でいくら支払う意思があるかを尋ねたところ、支払意思額の平均値は3,969円へ上昇した。

以上の結果から、今後は必要経費を抑える方法を検討する他、専門家ガイドをつける高価なスタディツアーとそうでないツアーの差別化を図ることや、ベーシックルートを廻るツアーに組み合わせ可能なイベントの企画・実施を進めるといった取り組みの検討が必要であろう。

### 3-4 体験イベント等オプションコンテンツへの評価

当該地域の文化的景観の魅力は、解説して景色を見せながら伝える以外にも、地元の人しか足を踏み入れないような場所を訪れたり、それぞれの季節でしか味わえない地場産品を味わったりすることで伝えることもできるという考えから、このツアーでは、表5に示すようなオプションを用意して、各回参加者に体験してもらった。図3の各イベントへの評価を見ると概ね高評価が付けられた。

表5 オプションコンテンツ一覧

共通イベント1	月湖を竹橋で渡るイベント
共通イベント2	地元の食材を使ったローカルランチ
体験イベントA-1	休憩のときに地元のフルーツを食べるイベント（第一回のみ）
体験イベントA-2	休憩のときに蓮の実を食べるイベント（第一回のみ）
参観イベント	明成殿の参観イベント（第二回のみ）
舟遊イベント	月湖をボートで渡るツアー（第二回のみ）
体験イベントB-1	地元の米を使ったライスベースト試食（第二回のみ）
体験イベントB-2	休憩のときに地元のお茶（第二回のみ）

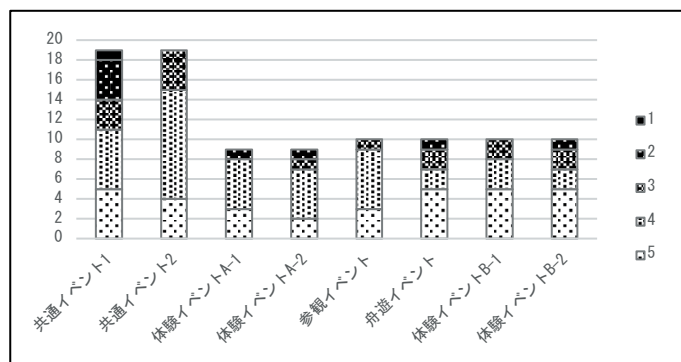


図3: オプションコンテンツに対する評価(5段階評価:5-1)

## 4. まとめと考察

第1回 EST は、ベトナム人に対する環境教育としてのツアーパッケージとして実施し、コンテンツや解説方法の

確認、改善点の洗い出しを行うことができた。それに加えて、当該地域の文化的景観をマネジメントしていく上で、地域資源を適正に保全・活用していく課題を、参加した集落住民や遺跡保存行政との協働によって解決していく方法について議論する機会となった点でも意義深い。

第2回 EST では外国人観光客を対象に実施した結果、こうした遺跡周辺の文化的景観が観光対象としてある一定の価値を有していることが明らかになった。

また、参加者の評判が良かったことに加えて、第2回 ESTの企画段階には、有志から「今の季節はこういう景色がアピールできる」といったアイデアを適宜提示してくれるようになるなど、自分たちの集落の魅力を再発見し訪問者にも楽しんでもらおうという意識が生まれてきたこともこのアクションリサーチの効果の1つと云えよう。今後は、こうした集落が主体となったエコツーリズムをより戦略的に推進するための組織形成を行い、個々人に過度な負担のかからない体制で、当該地域の文化的景観を持続可能な形でマネジメントするためのエコツーリズムのあり方について模索していきたい。

本研究はJSPS 科研費 26630280, 16H05754 の助成を受けたものです。

#### 【補注】

- 1) 嘉隆帝および親族、そしてその祖先である広南阮氏の陵墓の一部が含まれる遺跡群のことで、その面積は2,875haにおよぶ。
- 2) 参考文献1を参照のこと。
- 3) 参考文献2を参照のこと。
- 4) 参考文献3,4,5,6を参照のこと。
- 5) 著者らは古都フエ遺跡保存センター（Hue Monuments Conservation Centre. 以下 HMCC と略す。）をカウンターパートとして共同研究を継続的に遂行しているが、HMCC および地元政府は、フエの遺跡群をユネスコ世界遺産へ「文化的景観」としての再登録を視野にバッファゾーンを広げることを目指している。
- 6) HMCC 提供のデータによれば、遺跡の入場料による総収入は、2013年から2017年にかけて2倍ほど増加している。
- 7) 集落の概要は、参考文献7,8を参照のこと。
- 8) 世界遺産委員会により提唱された、遺産を保護するためにその周囲に設けられる利用制限区域のことで、ベトナム文化財保護法の制度上はゾーン2と位置づけられる。

#### 【参考文献】

1. 『フエ・阮朝期の皇族の陵墓について』ファン・タイン・ハイ、西村昌也、新江俊彦 周縁の文化交渉学シリーズ 3129-153, 2011年12月
2. 『Bulletin des Amis Du Vieux Hue -Le Tombeau de Gia-Long (BAVH) 阮朝のフランス保護国時代の史料, 1923, No.3, 資料編
3. 『On the Ecological Facts of the Historical Environments in the Eastern Asian Cities and Regions』N.Furukawa et al. APSA, India, Nov. 2009
4. 『阮朝時代に建造された歴代皇帝陵とその周辺地域における生態学的秩序の実態把握-』岸本奈々子、古川尚彬、佐藤滋, 2011年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 p.721-722
5. 『皇帝陵周辺村落の社会的実態』古川尚彬、岸本奈々子、佐藤滋, 2007年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 p.441-442
6. 『歴代皇帝陵の配置原理と周辺環境の都市形態学的秩序』岸本奈々子、古川尚彬、佐藤滋, 2007年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 p.439-440
7. 『嘉隆帝陵周辺の水田管理を担う集落の特徴と実態』中西美裕、寺澤裕実子、古川尚彬、佐藤滋, 2017年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 p.857-858
8. 『嘉隆帝陵の参拝経路における空間特性と周辺集落による管理の実態』寺澤裕実子、中西美裕、古川尚彬、佐藤滋, 2017年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 p.855-856